

# 小学生のタグラグビーにおけるボールの形状に関する研究

長尾 健太\*・中村 浩崇\*\*・榊原 潔\*\*\*

(平成26年9月29日受付：平成26年11月4日受理)

## 要 旨

ラグビーボールは、18世紀の半ば、イングランドのラグビー校の生徒たちが豚の膀胱（楕円形）を使用したところ、キックした後のボールの転がりが楕円形のボール特有の不規則な動きをして面白い、ハンドオフ（タックルする相手を片手で邪魔する）するには楕円形のボールの方が片手で抱えやすい、という理由から楕円形が主流になったとされている<sup>(1)</sup>。

しかし、タグラグビーは通常のラグビーとルール上、大きく異なる点がある。まず、ボールをキックしてはならない。また、タックルのような接触プレーが一切許されない。これらのルールがあることによって、タグラグビーにおいて楕円形のボールを使用する合理的な理由が見当たらず、その有効性に関して実践的な研究を行う必要があると考えた。

新潟県M市H小学校4・5・6年生 31名（男子18名、女子13名）は、学年、性別、運動能力、学習能力など等質になるように、ラグビーボール群（RB群）とドッジボール群（DB群）に分かれ、使用するボールが異なることを除き、同じ学習過程のもと学習した。

その結果、ドッジボールの方が正確なパスが投げやすく、またパスキャッチ後も前進できることが明らかとなった。ドッジボールの扱い易さから、男女混合のゲームの中でも、女子はゲームに積極的に参加し、チームに貢献できたことを実感できた。小学校体育におけるタグラグビーの使用球として、球形のドッジボールが適切であることが明らかとなった。

## KEY WORDS

Elementary School Children 小学生, Games ゲーム領域, Tag Rugby タグラグビー  
Ball Shape ボールの形状, Oval Ball 楕円形ボール, Spherical Ball 球形ボール

## 1 はじめに

平成20年に小学校学習指導要領が改訂され、ボール運動は、これまでの「バスケットボール」「サッカー」「ソフトボール又はソフトバレーボール」<sup>(2)</sup>から「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」の運動として示された<sup>(3)</sup>。これは、限られた体育の授業時間数の中で数多く存在する球技種目を全て取り扱うことはできないので、攻め方や守り方の特徴が共通する種目をまとめ、そのまとまりを代表する種目を通してそれぞれの型に共通した学習内容を学ばせることを意図した変更である<sup>(4)</sup>。この変更に伴い、「ゴール型」の種目としてタグラグビーが例示された<sup>(5)</sup>。

佐藤・鈴木<sup>(6)</sup>は、ポートボールと比較し、タグラグビーは得点動作、移動動作及びパス動作が「やさしい」ことを明らかにした。また、佐藤・鈴木<sup>(7)</sup>は、従来難しいとされてきたタグラグビーのスローフォワード（パスを前方に投げる反則）に焦点を当て、パスプレーについて「パス成功」と「パス失敗」に分類した研究を行った。6時間の授業実践の結果、小学校3年生と小学校5年生のパス成功率が有意に上昇し、学習経験を積み重ねることによって、スローフォワードルールも児童にとってやさしいものになると報告している。

このように、近年タグラグビーに関する研究が数多く見られるようになったが<sup>(8)</sup>、授業に適した使用球に関する研究は見当たらない。

本研究では、タグラグビーにおける使用球の有用性を、小学生を対象とした授業実践から、映像分析と運動有能感テスト、形成的授業評価を用いて明らかにすることを目的とする。

## 2 研究の方法

### 2. 1 授業実践の方法

期間：2012年1月26日～2012年3月2日（1回45分 計6回）

対象：新潟県M市H小学校4・5・6年生 31名（男子18名，女子13名）。児童は，学年，性別，運動能力，学習能力など等質になるように，ラグビーボール群（以下RB群と呼ぶ）とドッジボール群（以下DB群と呼ぶ）に分かれ，使用するボール以外は同じ学習過程のもと学習した。各群の性別，学年別の人数は表1に示す。

表1 RB群とDB群の学年別，男女別の人数

	4年生		5年生		6年生		計
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
RB群	4	2	1	2	4	3	16
DB群	4	2	1	1	4	3	15

単位：人

なお，全ての授業の実践，撮影及び分析は，担任教師，保護者ならびに学校長の了解を得て行われた。

授業者：TN教諭（H小学校男性教諭 教職経験5年）。6年生の担任であるが，通常から4，5，6年生の合同体育を担当している。

単元名：ボール運動「タグラグビー」

活動場所：H小学校体育館

体育館を2つに分割し，それぞれの群は，縦15m，横10mの広さのコートでゲームを行った。

用具：ボールとタグ及びタグベルト

RB群が使用したタグラグビー用ボールは，重さ280g，長い方の外周68.5cm，短い方の外周51cm，人工皮革製であった（M社製品）。

DB群が使用したドッジボールは，重さ300g，外周63cmのゴム製であった（M社製品）。

タグは，幅5cm，長さ32cmのナイロン製で，タグベルトにマジックテープで装着する市販品（A社製品）を使用した。

### 2. 2 タグラグビーのルール

授業で採用したルールは，日本ラグビーフットボール協会発行の競技規則<sup>9)</sup>を参考に，以下の通りとした。

#### 2. 2. 1 ゲームの進め方，得点方法，勝負の決め方

- ・コート上のプレイヤーは，各チーム4人であり，4対4の計8人で行う。
- ・試合開始やトライされた後は，コートの中央から開始する。
- ・エンドラインを越えるとトライ（1点）である（怪我防止の観点から，ボールを床に置く必要はない）。
- ・プレイヤーはボールを前方（攻撃方向）に投げてはいけない（真横は良い）。
- ・ボールがサイドラインから出た場合は，最後にボールを触れたチームと反対側のチームが，ボールが出た地点から，味方にパスをしてゲームを再開する。なお，この場合もボールは前方に投げてはいけない。
- ・タグを取ったプレイヤーは「タグ」とコールすることでタグを取ったことを審判にアピールする。
- ・タグを取られたプレイヤーはその場に止まらなければならない。
- ・タグを取られた場所から，攻撃側は再度攻撃を再開するが，2回タグを取られると，その場所から，攻撃権が相手チームに移行する。

#### 2. 2. 2 禁止事項

- ・相手をつかんだり，タックルしたり，足をひっかけたりする危険なプレーをしてはいけない。
- ・プレイヤーはボールを蹴ってはいけない。
- ・タグを取られたプレイヤーはタグを腰に装着するまで，ゲームに参加してはいけない。同様に，タグ装着まで，タグを取ったプレイヤーもゲームに参加できない。

### 2. 3 学習過程

学習過程の概要は表2に示す。

表2 学習過程の概要

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目
はじめ	投距離測定 しっぽ取り	しっぽ取り パス練習 (2人組)	しっぽ取り パス練習 (3人組)	しっぽ取り パス練習 (3人組)	しっぽ取り パス練習 (3人組)	投距離測定 しっぽ取り
なか	はじめの ゲーム	ゲーム① ゲーム②	ゲーム③ ゲーム④	ゲーム⑤ ゲーム⑥	まとめの ゲーム	対抗戦① 対抗戦②
まとめ	運動有能感 テスト  形成的授業 評価		形成的授業 評価			運動有能感 テスト  形成的授業 評価

## 2. 4 撮影条件

児童の練習及びゲームの様子は、8mmビデオカメラ2台を使用し体育館ステージ上から撮影した。ゲームを行っているプレイヤー全員が画面に入るように、三脚に装着したビデオカメラを動かしながら撮影した。その際、個人が特定できるように毎回同じ色、番号のビブスを着用するよう指示した。

## 2. 5 運動有能感テスト

授業前（1回目）及び授業後（6回目）に、12問からなる運動有能感テスト<sup>(10)</sup>を実施した。運動有能感は「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」の3因子で構成される。「身体的有能さの認知」は、自己の運動能力、運動技能に関する肯定的な認知に関する因子であり、「統制感」は自己の努力や練習によって運動をどの程度コントロールできると認知しているかを示す因子、「受容感」は運動場面で教師や仲間から自分が受け入れられているという認知に関する因子である。

## 2. 6 形成的授業評価

授業の目標や内容が授業の営みによってどの程度実現されたのかを明らかにするために授業評価が行われる。形成的授業評価は、授業評価の観点（意欲・関心・態度、思考・判断、技能、知識・理解）にほぼ符号する4次元（成果、意欲・関心、学び方、協力）の評価項目からなる<sup>(11)</sup>。実際に体育授業を受けた児童達が、毎授業終了後にその授業に関して評価するものである。

今回は、1、3、6回目の授業終了後、長谷川ら<sup>(12)</sup>によって作成された小学生を対象とした形成的授業評価を全ての学習者に配付して評価させた。形成的授業評価は、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3選択4次元9問から構成した。

## 2. 7 映像分析

はじめのゲームとまとめのゲームの映像から、パス及びランの場面を抽出し、以下の観点に沿って分類した。パスを受け取ったプレイヤーのランを観察することで、投げられたパスの有効性を判断できると考えた。

### 2. 7. 1 パスについて

パス成功：ボールを保持していたプレイヤーのパスを味方プレイヤーが落とすことなくキャッチした場合。

パス失敗：①ボールを保持していたプレイヤーのパスを味方プレイヤーが落とした場合。②ボールを保持していたプレイヤーのパスが意図しない方向に飛んでしまい、ルーズボールになったり相手ボールになった場合。③ボールを保持していたプレイヤーが前方へパスした場合（スローフォワード）。

### 2. 7. 2 ランについて

ラン成功：パスを受けたプレイヤーのランが前進した場合。

ラン失敗：パスを受けたプレイヤーのランが停滞もしくは後退した場合。

## 2. 8 分析内容と手順

### 2. 8. 1 運動有能感テスト

各設問には、いいえ（1点）、やや思わない（2点）、どちらでもない（3点）、ややそう思う（4点）、そう思う（5点）を付与し、得点化した。各問5点満点の12項目で合計60点満点を、群間の比較を容易にするため5点満点に換算した。例として、合計45点であれば、3.75点に換算した。

### 2. 8. 2 形成的授業評価

「はい」に3点、「どちらでもない」に2点、「いいえ」に1点を与え、9問の平均点を総合評価として算出した。また、成果、意欲・関心、学び方、協力の設問ごとの平均点を各次元の評価として算出した。これを評定に読み替えて、評価を決定した。

### 2. 8. 3 映像分析

パスの成功と失敗の総数及びランの成功と失敗の総数をもとに、パスの成功率とランの成功率を算出した。

### 2. 8. 4 統計処理

JavaScript-STAR 2012<sup>(13)</sup>を用い、運動有能感テストの結果は、ボール条件（2）×テスト時期（2）の要因について2要因分散分析を行った。形成的授業評価の結果は、ボール条件（2）×テスト時期（3）の要因について2要因分散分析を行った。群間、男女別の授業前後の平均運動有能感テストについては、ボール条件（2）×性別（2）×テスト時期（2）の要因について3要因分散分析をおこなった。なお多重比較にはLSD法を用い、有意水準は5%とした。

パス成功率及びラン成功率は、直接確率計算2×2を用い、群間及び授業前後の比較を行った。

## 3 結果及び考察

### 3. 1 運動有能感

分散分析の結果、A（ボールの違い）の主効果、B（テスト時期）の主効果ともに有意な差は認められなかった（図1）。

運動有能感には男女差が見られることが報告されている<sup>(14)</sup>。そこで、男女別に、ボール条件（2）×テスト時期（2）の要因について2要因分散分析を行った。

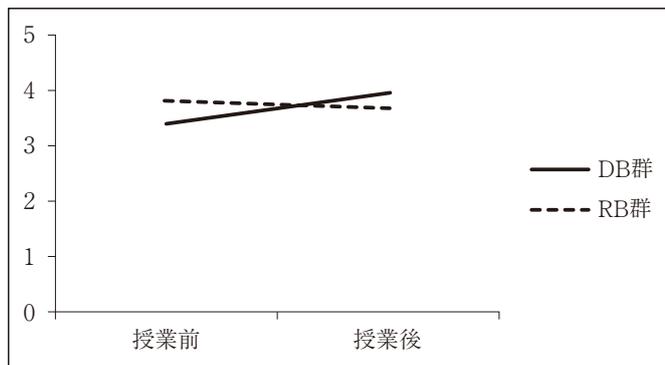


図1 群別の授業前後における換算した運動有能感テスト得点 (単位: 点)

分散分析の結果、男子では、A（ボールの違い）の主効果、B（テスト時期）の主効果に有意な差は認められなかった。女子でも、A（ボールの違い）の主効果、B（テスト時期）の主効果に有意な差は認められなかったが、交互作用では有意な傾向が認められた ( $F(1, 9) = 3.86, p < .10$ ) (図2)。

さらに、下位の検定を行ったところ、DB群の女子のみ授業前後で運動有能感が上昇傾向にあることが認められた ( $F(1, 9) = 5.57, p < .05$ )。

群間では有意な差は見られなかったが、男女に分けて分析するとDB群女子にのみ有意な傾向が見られた。授業前の4群のなかで、もっとも運動有能感が低かった ( $3.16 \pm 1.16$ ) DB群女子が授業後には最も高くなっている ( $4.10 \pm 0.74$ )。逆転現象が生じたことは注目される (表3)。

さらに上記のDB群の女子の有能感の変化を3項目別（身体的有能感の認知、統制感、受容感）に表に示した (表3)。身体的有能感の認知、統制感、受容感の3項目とも、授業後に得点が増える傾向を示した。DB群女子は、ドッジボールを用いたタグラグビーの学習を通じて、「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」を高めたという結果であった。ドッジボールの扱いの容易さから、タグラグビーを肯定的に捉え、パス練習やゲームに積極的に参加し、チームに貢献できたことが実感できたと推察される。

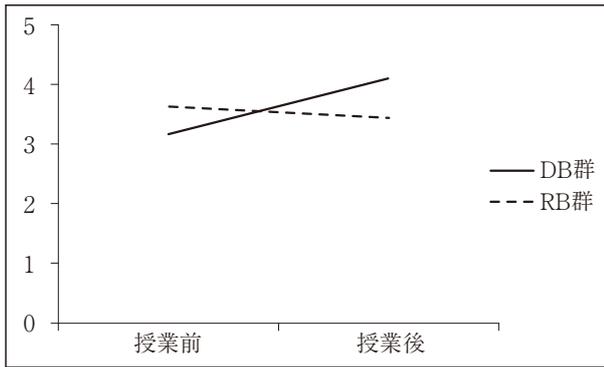


図2 女子の群別の授業前後における換算した運動有能感得点 (単位: 点)

表3 DB群女子の授業前後における運動有能感テストの質問別自己評価得点の平均と標準偏差

	授業前	授業後
身体的有能感の認知	2.60±6.21	3.50±5.47
統制感	3.00±5.17	4.20±3.71
受容感	3.90±5.53	4.60±1.35
総合評価	3.16±1.16	4.10±0.74

### 3. 2 形式的授業評価

分散分析の結果, A (ボールの違い) の主効果, B (テスト時期) の主効果ともに有意な差は認められなかった。両群とも, 常に総合評価は5段階評価で5ないし4という良い授業環境にあった。

これらの結果から, どちらの群も児童が「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」を実感できる良い授業環境にあったと推察される。

### 3. 3 映像分析

#### 3. 3. 1 パス成功率

各群のパス成功数及び失敗数について, 授業前後, 群間で比較するために直接確率計算 2 × 2 による検定を行ったところ次のような結果が得られた。

RB群のパス成功率は, 66.3%から81.2%に有意に上昇した (p=0.0438, 両側検定)。これに対して, DB群では授業前後で有意な差が認められなかった (p=0.4319, 両側検定)。

RB群では, 授業によって徐々に楕円形ボールの扱いに慣れることで, パス成功率が上昇したと推測される。これに対してDB群は当初から, ドッジボールの扱いに慣れているのでパス成功率に大きな変化は見られなかった (85.2%から90.7%) と推測される。

表4 各群の授業前後におけるパス成功及び失敗本数とパス成功率

	RB群		DB群	
	授業前	授業後	授業前	授業後
パス成功 (本)	53	56	69	49
パス失敗 (本)	27	13	12	5
パス成功率 (%)	66.3	↑ 81.2	85.2	→ 90.7

授業前からDB群の方がパス成功率が高いということから, 児童にとってドッジボールの方が扱いやすいと推測される。しかし, 授業後では両群に有意な差は無い (RB群81.2%, DB群は90.7%) という結果であった。両群とも, ゲームの実践的経験が深まることでパス成功率は上昇するが, RB群の方が大きく伸びるので, 授業後には, 両群のパス成功率に有意な差は認められなくなった。

#### 3. 3. 2 ラン成功率

各群のラン成功数及び失敗数について, 授業前後, 群間で比較するために直接確率計算 2 × 2 による検定を行ったところ次のような結果が得られた。

RB群は授業後に, ラン成功率 (39.7%から68.3%) が有意に上昇した (p=0.0022, 両側検定)。また, DB群も授業後に, ラン成功率 (68.3%から85.5%) が有意に上昇した (p=0.0351, 両側検定)。両群ともに授業後にラン成功率が有意に上昇した。ゲームの実践的経験が深まることで有効なラン攻撃ができるようになったと考えられる。

しかし, 授業後のラン成功率を比較すると, DB群のラン成功率が有意に高い (RB群68.6%, DB群85.5%) という結果であった (p=0.0320, 両側検定)。ラン成功率の差はゲームの実践的経験を経ても埋まらなかった。

表5 各群の授業前後におけるラン成功及び失敗本数とラン成功率

	RB群		DB群	
	授業前	授業後	授業前	授業後
ラン成功 (本)	25	43	48	47
ラン失敗 (本)	38	20	22	8
ラン成功率 (%)	39.7	↑ 68.3	68.6	↑ 85.5

ランに関する比較をまとめると、両群とも、ゲームの実践的経験が深まることでラン成功率が上昇した。しかし、DB群の方がRB群より授業当初からラン成功率は高く、授業後もその優位性に変化は見られなかった。

### 3. 3. 3 映像分析のまとめ

そもそも、ラグビーは陣取り型ゴールゲームである。パスは前方に投げることはできず、キックは禁止されているため、ボールを持って走る行為、つまりランだけが唯一陣地を獲得する方法であり、得点（トライ）する方法である。そのため、ラグビーでは、パスとランに強い関連性があると考えられる。

授業前からDB群の方がパス成功率が高かったことから、児童にとってドッジボールの方が扱いやすいと推測される。しかし、両群ともゲームの実践的経験が深まることでパス成功率が上昇する。RB群の方が大きく伸びるので、授業後には、両群のパス成功率に有意な差は認められなくなる。

パス成功率では授業後に有意な差が認められなかった両群だが、ラン成功率では授業後でも両群に有意な差が認められた。受け手の有効なラン攻撃につながった結果から、DB群のパスの方が効果的なパスであったと推測される。つまり、同じパスでもDB群のパスの方がRB群のパスのより戦術的に有効なパスであったと考えられる。

## 4 結論

(1)RB群とDB群では授業前から、パス成功率に有意な差 (RB群66.3%, DB群85.2%) があった。当初、児童にとっては、日頃慣れ親しんでいるドッジボールの方が扱いやすいという結果が示された。しかし、授業実践が深まるにつれ両者の成功率は上昇し、授業後には有意な差は示されなかった (RB群81.2%, DB群は90.7%)。つまり、最終的にはボールの扱いやすさに決定的な差は見当たらなかった。

(2)RB群とDB群では授業前から、パスと同様にラン成功率に有意な差 (RB群39.7%, DB群68.3%) があった。さらに授業後でも両群の差 (RB群68.6%, DB群85.5%) は有意であった。ドッジボールを使ったDB群は、ボールが扱い易いため、ボール扱いそのものよりも、どのようにボールを進めトライするかを意識が向いていたと考えられる。したがって、DB群のパスの方がRB群のパスのより戦術的に効果的なパスであったと推測される。

(3)運動有能感テストの結果、DB群の女子のみ運動有能感が有意に上昇することを示した。ボール扱いの容易さから、ラグビーを肯定的に捉え、パス練習やゲームに積極的に参加し、チームに貢献できたことが実感できたと推察される。

佐藤<sup>(15)</sup>は、楕円球は持って走るのに適している、両手で下から投げやすい、受け手が胸でキャッチしやすいとの理由から、ラグビーの授業で楕円球を使用することを推奨している。しかし、実際にデータを示して説明しているわけではない。今回の実践を通して、ドッジボールはラグビーボールに比べ、正確なパスが投げやすく、またパスキャッチ後も前進できること、ドッジボールの扱い易さから男女混合のゲームの中でも女子はゲームに積極的に参加し、チームに貢献できたことを実感できること、が明らかとなった。小学校体育におけるラグビーの使用球として、球形のドッジボールが適切であることが示されたものとする。

授業では、児童の実態に合わせてボールを選択することは日常的に行われている。サッカーでは、当たっても痛くない、ボールコントロールが容易との理由からスポンジボールを用いた研究<sup>(16)</sup>、体育館の床を二次元的に移動するように手作りした円盤形のボールを用いた実践<sup>(17)</sup>、円盤形のボールを更に改良した「クッションボール」を用いた実践<sup>(18)</sup>、弾まない、転がりにくい「新聞紙ボール」を用いた研究<sup>(19)</sup>があり、それぞれのボールが学習に有効に働いたことを述べている。いずれも、五角形と六角形を組み合わせたサッカーボール特有のデザインや形状、弾む性質にこだ

わっていない。

体育授業では、「学習内容を習得するための手段であり、その学習内容の習得をめぐる教授＝学習活動の直接の対象となるもの」<sup>(20)</sup>としてボールを捉え、学習内容に適したボールを選択する必要性が改めて示されたものと考えられる。

## 文献

- (1) 中村敏雄：ラグビーボールはなぜ楕円形なの？，大修館書店，pp.86-91，1992.
- (2) 文部省：小学校学習指導要領，p.86，1998.
- (3) 文部科学省 a：小学校学習指導要領，東京書籍，p.99，2008.
- (4) 高橋健夫：本書を読まれる方に，高橋，立木，岡出，鈴木：新学習指導要領準拠新しいボールゲームの授業づくり，体育科教育別冊，58(3)，p.1，2010.
- (5) 文部科学省 b：小学校学習指導要領解説体育編，東洋館出版社，p.52，2008.
- (6) 佐藤善人・鈴木秀人：小学校体育におけるラグビーに関する一考察－ポートボールとの個人技術をめぐる「やさしさ」の比較を中心に－，体育科教育学研究，24(2)，1-12，2008.
- (7) 佐藤善人・鈴木秀人：小学校の体育授業におけるタグ・ラグビーに関する研究－スローフォワードルールに焦点をあてて－，スポーツ教育学研究，28，1-11，2008.
- (8) 鈴木秀人：派生的ボールゲームとしての「ラグビー」に関する一考察－ラグビーフットボールとの相違点からの検討－，体育科教育学研究，28(2)，1-14，2012.
- (9) (公財)日本ラグビーフットボール協会：ラグビー競技規則，[www.tagrugby-japan.jp/rule/](http://www.tagrugby-japan.jp/rule/)（参照日2012年1月20日）
- (10) 岡澤祥訓・木谷博記・木谷真佐美：小学校低学年用運動有能感測定尺度の作成，奈良教育大学紀要，50(1)，91-95，2001.
- (11) 高橋健夫：子どもが評価する体育授業過程の特徴：授業過程の学習行動及び指導行動と子どもによる授業評価との関係を中心にして，体育学研究，45，147-162，2000.
- (12) 長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子：小学校体育授業の形成的授業評価票及び診断基準作成の試み，スポーツ教育学研究，14(2)，91-101，1995.
- (13) 田中敏，中野博幸：クイック・データアナリシス 10秒でできる実践データ解析法，新曜社，pp.1-28，2004.
- (14) 岡澤祥訓・北真佐美：運動有能感の構造とその測定方法，体育科教育，46(8)，69-71，1998.
- (15) 佐藤善人：ラグビーの実践を始める前に知っておきたいルールのあれこれ，体育科教育，59(13)，19-22，2011.
- (16) 後藤幸弘・瀬谷圭太：サポートの動きを学習する「サッカー課題ゲーム」の開発とその有効性の検討，兵庫教育大学研究紀要，37，121-136，2010.
- (17) 菅沼太郎・岩田靖・千野孝幸：小学校体育におけるゴール型教材の開発とその実践的検討－「センタリング・サッカー」の構想とその分析－，信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要教育実践研究，9，121-130，2008.
- (18) 横井和浩・北垣内博・岩田靖：戦術学習を保障する「スライドボール・サッカー」，体育科教育，62(10)，32-36，2014.
- (19) 榊原潔・土田了輔・船中洋平：条件を付加したゲームが状況判断力の学習に及ぼす影響－サッカー型の攻撃時ゲームパフォーマンスに着目して－，上越教育大学研究紀要，33，249-258，2014.
- (20) 丸山真司・岩田靖：対談・体育における「教具」とは，体育科教育，60(6)，10-15，2012.

# A Study on the Ball Shape of Tag Rugby in Physical Education Lessons of Elementary School

Kenta NAGAO\* · Takahiro NAKAMURA\*\* · Kiyoshi SAKAKIBARA\*\*\*

## ABSTRACT

In the middle of the 18th century, students of Rugby School of England used the bladder of the pig for the ball when they played rugby. Because of interest of irregular rolling of the ball after the kick, and ease to carry with one hand to handoff (interfere with one hand whom to tackle), an oval ball became the mainstream.

There are some different points on the rule between rugby and tag rugby. First, it is not allowed to kick the ball in tag rugby. Second, the contact play such as the tackle is not allowed at all in tag rugby.

The purpose of this study is to clear the effect of a spherical ball in tag rugby. 31 elementary school children participated in this study for 6 times in their PE class. They were divided into two groups, rugby ball group (RB group) and dodge ball group (DB group).

As a result, DB group could pass the ball more accurately, and run more forward after catch the ball than RB group. The spherical ball is appropriate for tag rugby in physical education lessons of elementary school.